

生徒の居場所

——定時制における表現指導の試み——

長野高教組 木曾支部 木曾高等学校定時制 大西 浩

| | |
|--------------|----|
| 1、 本校の実態 | 1 |
| 2、 校内生活体験発表会 | 2 |
| 3、 国語の授業の中で | 3 |
| 4、 本年度の生徒作品 | 3 |
| 5、 終わりに | 11 |
| 6、 参考資料 | 12 |

1、本校の実態

長野県内では、地域住民や生徒、保護者、教職員などの意見を無視した形で、来年度から2つの定時制高校が募集停止になることが、11月の県教委の定例会で最終決定されてしまった。産業構造や社会の変化に伴い、定時制にはかつての働きながら学ぶ勤労学生が減少し、新たに定時制を必要とする子どもたちが集まってきている。しかし県教委は「初めに定時制統廃合の結論ありき」で動き、経済効率を優先した財政的な理由を全面に打ち出した体のいい弱者切り捨て策を強行しようとしている。こうした施策が、地域や現場の声を無視した形で行なわれていくことには強い危惧と怒りを禁じ得ない。

さてそんな状況の中、本校に在籍する生徒数は、1年8名(7)、2年7名(5)、3年6名(6)、4年9名(6)の合計30名である。本校にも様々な生徒がいるが、とりわけ小中学時代不登校を経験した者の割合が高い。ここに示した各学年の括弧内の数は、本校入学以前に不登校を経験している生徒の内数であるが、実に全生徒の8割に当たる24名が不登校経験者である。

彼らの不登校になった経緯は様々であるが、自ら外との関係を絶ってきた彼らの中には、発達段階において、本来人間関係の訓練をしていく部分が欠落している生徒も多く、定時制に入学してもしばらくは、人間関係の構築が難しく、入学してもなかなか自分の居場所を見いだせない生徒も多い。しかし、少人数という枠の中で少しずつ仲間との関係もでき、学年が進むにつれ自分の居場所を自分で見つけていく。そんな意味で定時制という場所は、彼らにとってなくてはならない場所である。

多くの生徒が小学校や中学校へ通っていないということから学力差も非常に大きい。昨年度授業の取り組みの一つとして、希望者に漢字検定を受検させた。受けた生徒は4名であったが、全日の高校を中

退したAは準2級合格、しかし、一方7級に不合格という生徒もいた。わずか30人でこれだけの幅のある生徒。生きていく上で最も基本になる読み、書き、算の部分で考えれば恐らく小学校3年生程度の学力であろうと思われる生徒もいる。したがって、実際には、数学英語などは分数の計算や正負の計算はおろか九九、アルファベットの書き方などもおぼつかない生徒から全日の高校を中退してきた生徒までに対応するためには、習熟度別授業を組まざるを得ない状況にある。

しかし、国語という教科においては、教室の中で、相互に影響しあうことによってつけられる力があると考えている私（国語科は一人）は、あえて習熟度別学習はとっていない。

2、校内生活体験発表会

定時制には、自己の学校での生活体験を人前で発表する「生活体験発表大会」という独特の行事がある。これは校内、地区、県、全国へと続く一連の大会なのだが、人前で自分の体験を述べるということは、定時制の生徒にとっては、非常に大きな試練である。

本校ではあえてその困難な発表会を全員が発表し、全員が聞くという形で行っている。（県内の他校の様子を聞いても全員に発表を課している学校は少ないと思われる）発表会は毎年9月上旬に生徒の出身中学の先生や保護者などにも来て頂いて実施する。一人一人が全校生徒および来賓（定時制振興会長、同窓会、保護者、全定の職員、中学の先生など）の前で、自分の体験を作文にまとめ7分以内で発表するのである。発表原稿の作成にはおもに国語科が関わるが、この行事に向けては、全職員一体となって取り組んでいる。

毎年、この発表会は、参加した方（特に出身中学の担任や保護者）からは非常な感銘を受けたという感想をいただいている。しかし、原稿は9割以上の生徒が完成させているものの、現実の大会の中では出席し、発表できる生徒はおよそ半数である。一年生は、7割方発表するが、二年三年は極端に出席率が下がる。ところが四年生になると例年八割以上が発表している。そして四年次にはそれぞれの生徒が自信を持って自分の歩んできた道を語る。ちなみに現在私は四年生の担任（一年から持ち上げ）であるが、一年時からの発表者数の推移を見ると、一年次五人、二年次四人、三年次二人、四年次六人である。一年の時にはなんとといっても作文を書こうとしなかったYは二年生のときには発表会の数日後に原稿を持ってきた。三年次には当日までに作文は仕上げたものの当日は欠席。ところが、今年は立派に発表し、感極まって途中で泣き出してしまうという一面もあった。この生徒の心のありようはある意味定時制の生徒の心を代弁していると言えるかもしれない。そして、ここに僕は生徒の成長を見る。多くの生徒は、この生徒と同じような心の成長を遂げている。

3、国語の授業の中で

発表会は前述した通り、9月上旬に行う。7月末に文化祭が行われ、時間の制約のある定時制ではこの前およそ1か月は授業を大幅にカットして、文化祭の準備にあたるため、毎年7月頭からこの発表会の原稿作りを始める。授業は毎年次のような流れで行っている。(完成原稿はパソコンに打ち込んだものにするため、上級生になると最初からパソコンに向かう生徒もいるが、それも認めている。)

- ①前年までの優れた作品を提示する。(毎年その年度ごとに全員のをまとめた文集を作成しているので、それが財産として蓄積されている。)《2時間》
- ②構想を練らせる。(書くことがない、書いたことがない、作文を完成させたことがないという生徒と適宜ディスカッションをしながら少しずつ書く意欲を喚起する。)《ここからは完全に個別指導になるが、早い生徒は1時間、平均で3～4時間とる。中には7、8時間かけて丹念に対話する場合もある。》
- ③下書き(夏休みが終わるまでには書いてくるように指示するが、ほとんど書いてくる生徒はいない。この段階では時には生徒から話を聞きながら、こちらが断片的なメモをとるような場合もある。それを生徒と一緒に組み立てて話を構築していく。したがって②③の作業は同時展開になる生徒もいる。)《時間は生徒によりまちまち》
- ④推敲(主として文脈のねじれやいい足りない部分、文法的な誤り等にとどめ、基本的には本人のいいまわしや表現をできるだけ活かすようにして、私が推敲することが多い。)
- ⑤清書(パソコンに打ち込み、完成原稿をつくる。)《時間は生徒によりまちまち》
- ⑥発表の練習(生徒同士、他教科、担任の先生などの前で練習する。)《最低1時間》
- ⑦当日(生活体験発表会の審査基準にのっとり、参加者全員が評価する。)

4、本年度の生徒作品

「定時制での生活」 一年 S

僕は、中学校の進路を決める時、最初は兄の勧めもあり、木曽高校の全日制への進学を考えていた。だけど、人がたくさんいるのが嫌いな自分。それに、中学では、勉強より遊びって感じだった。

授業中は、友達とキャッチボールやバドミントンをしていた。ほとんど教室には居なくて保健室が僕の居場所だった。まあ、全日制に付いて行ける頭ではなかったということ。

まあそれはさておき。高校生活は自分の中では、それなりに充実したものだった。毎日やる仕事がある、そういうことが今までの僕にはなかった。おおげさに言えば存在価値が見つかったからだった。

中学の時の教室は、行っても場違いな気がした。よく分からないが、僕には居る所ではないような気がしていた。考えすぎとも思ったが結論はいつもそうだった。

だから、高校生活は自分の居場所を無くさないようにしたい。

「ねこ・・・とバイト」 二年 H

僕は猫を飼っている。猫を見てるとなんか落ち着く気がする。三匹居たけど一匹はもう五ヶ月以上帰って来ない。

僕は「猫はいつも何を考えているんだろう？」と思うと、不思議でしょうがない。たとえば家の中から座って外をボーっと見ていたり、何か一点を真剣に見つめていたり。僕にはなんか猫がうらやましく思えて仕方がない。ネコのように、一日中自分のしたいように過ごせたらどんなにいいだろうとも思う。

ところで話は変わるけど、僕は今年の五月頃から木曾福島町内のそば屋でバイトをし始めた。バイトは想像以上にきつい。例えば食器を洗ったり、ソバ粉をこねたりする。こねる時は直径五十cmぐらいの鉢に入ったそば粉を手の平を使って体重をかける。けっこう大変な仕事だ。

定時と仕事を両立するのはもっとキツイ。夏休みに入ると学校は休みでもバイトがあるので休みという休みはそんなになかった。僕は始めは何も思わなかったけど、休みの日にバイトに行くと「何でみんなが休んでる日まで僕は動かなきゃいけないんだ」と思うようになってきた。

そんな時ネコを見るといろんな気分が晴れていくような気がする。僕にとってネコはなくてはならないものだ。ネコ君日ごろありがとう。

「学校での悩み」 二年 S

木曾高校に入学しての一年間はクラスメートとの年齢の差のことでとても悩みました。入学した頃の頃はなんとかクラスに溶け込もうとみんなに声をかけていました。しかしみんなの方からは話しかけてもらえませんでした。こういった日々が長く続くとやっぱり年齢の差があるから話し掛けづらいのかと思いととても悩みました。でも自分から進んで話しかけることはやめませんでした。

二年生になり少しなれてきたせいか前よりは話ができるようになってきました。これからは今以上に積極的に話をしてみんなのことを理解し自分のことも知ってもらいたいと思います。これからの学校生活が今以上に楽しくなるように頑張っていきたいです

「経験」 三年 N

僕は十八年間の道のりを歩んできました。この十八年間で僕は色々な経験をしてきたと思います。その経験の中で、後悔やバカな事したな一と思うこと、身の周りの人たちに迷惑をかけてしまった事などありますが、その一つ一つが、どれも今の自分を作っているように思います。

この経験の中で、よく思うことがあります。それは、木曾高校の定時制に入って良かったと言うことです。理由は色々ありますが、特に思うことは、本当に意味のある『人生の回り道』が出来たからです。

僕は、ある全日制の高校を一年生のときに休学して、次の年に、もう一度一年生からやり直すために、定時制に編入しました。この定時制に入ってから、僕はたくさんの事を学び、壁にぶち当たってきたと思います。

一つは、昼間はアルバイトをして、夜学校に通うという生活です。今、昼間は何もしていませんが、去年までの二年間は色々なところでアルバイトをしてきました。接客業や工場勤務などです。アルバイトとは言っても、朝から夕方までの、約八時間を働くわけですから、学生と言うよりは、社会人に近いものだったと思います。上司がいて、言われた事をこなして行く。口で言うのは簡単ですが、実際に体験して分かったことがあります。それは、どんな事にも責任がついて回ると言うことです。今までの自分は、誰かがやってくれるとか、少しくらい手を抜いても平気だとか、甘えていた部分があったと思います。でも、仕事は自分のミスや甘え一つで、多くの人たちに迷惑をかけてしまいます。社会人の世界では、甘えも言い訳も通用しません。この一つの経験をした事で、何をやるにも例えどんなに小さな事でも、自分にかかる責任の重さや、大切さを知る事が出来たと思います。

次に、かけがえのない友達や、信頼できる先生達などに出会えた事です。定時制に入って、まず始めに驚いた事は、先生と生徒との距離が、とても近かったことです。今まで僕が出会ってきた先生のイメージは、自分より高い視線から物事を喋り、先生と生徒と言う関係がハッキリしていた様に思えます。でも、定時制の先生は違いました。生徒と真剣に向き合い、目の高さを同じにしてくれ、先生と生徒と言う関係でなく、一人の人間として話を聞いてくれます。今では先生が僕の、相談相手であり、そんな先生達に、僕は何回も救われています。

定時制に入った事で、出会えた友達もたくさん居ます。そして、今の僕を支えてくれている一つでもあります。中学や全日に居たときにも、色々な友達が居ました。でも、ほとんどの友達に、気をつかい、顔色をうかがったりと、心から信頼できる友達は、少なかったと思います。定時制に入ってから、それは段々変わってきました。文化祭などの学校行事では、みんなで協力して楽しみながら準備をし、一つの事に打ち込む。授業中では、一緒に笑いながら勉強し、お互いの目標に向かって頑張る。そして、僕に何かがあれば、涙を流してくれ、背中を押してくれる。気が付けば、どんな時にも、この定時制で出会った友達が側にいました。自分のことで泣いてくれる友達が出来たこと、それが、とても心強かったです。

そんな色々な出来事のたびに、一緒に笑ったり、悔しい思いをしたり、衝突したりと、様々な感情を友達にぶつけたりして来ましたが、友達は、その都度それに答えてくれます。そんな経験を重ねて行くうちに、『ありのままの自分』をさらけ出すことが出来ました。この事は僕にとって、とても大きな一歩でした。これまでの僕は、自分の意見を表に出せず、我慢ばかりしてきました。だからこそ、意見をハッキリ言えるようになった事が、とても嬉しかったです。

『ありのままの自分』をさらけ出せる場所。『支えてくれる人』が居る場所。僕にとって学校は、勉強する場所でもありますが、とにかく必要で大切な場所です。

僕はもう、高校生を四年やっています。人より少し長い高校生活を経験し、一年・二年の回り道をしています。この道を選んだ事で、大切な人とも出会い、今も僕を支えてくれています。ここで学んだ事や経験を、行動に移す事が出来るように、時間をかけて少しずつ努力し、自分の成長につながって行け

ば、良いと思います。自分で選んだ、この『最高の人生の回り道』自信を持って歩んで行きたいと思えます。こうして今の自分があるのは、この道のおかげなのだから。

「友」 四年 S

私が定時制に入ってきたのは、一年の九月の時でした。最初に入ったのは全日制の学校でした。でも、そこは入学して一ヶ月ほど行っただけで行けなくなってしまいました。その頃、私は友達との付き合い方と言うものがよく分かっていませんでした。なにかと言うと相手の機嫌をとっていた気がします。仲の良い人達の中に居ても、いつも一人のような感じがしていたのです。

そんな私に定時制を紹介してくれたのは、姉でした。でも、きっと定時制へ入ってもそんなに変わらないだろうと思っていました。怖かったのです。・・・しかしその怖かった気持ちも今はまったくありません。

定時制へ入ったばかりの頃、知らない人達があたかも友達のように話してきたのです。最初はビックリしました。でも、それが定時制の良いところなのです。

私もだんだんその温かい空気になじんでいきました。そして、それまで出していなかった『自分』を出していったのです。定時の皆もありのままの自分でせっしてくれるので、定時の皆はなんでも言い合える仲だと思っています。今までで一番と言っているほど嬉しかった事があります。・・・私は小学校、中学校とずっと誰かに誕生日を祝ってもらったことがありませんでした。しかし、定時に入って初めて誕生日を祝ってもらえたのです。私はその祝ってもらった時に「生まれてきて良かった」と、心からそう思ったことを今でも忘れません。

私はそれまで「自分は何のために産まれてきたんだろう」と悩むこともありましたが、でも、なんて言えればいいのでしょうか・・・誰かが自分の誕生日を覚えていてくれるだけで、生きている『価値』はあるんだと思えるような気がしたのです。私はこんなに素晴らしい友達に出会えて幸せだと思います。

でも、卒業と言う形でその素晴らしい友達とももうすぐお別れです。卒業すれば皆、それぞれ別々の道に進んでいってしまいます。私は、今それが悲しくて仕方ありません。出来ることならずっと一緒にいたいくらいです。・・・今、私には夢がありません。そのことで悩んだり、泣いたりしています。そんな私にある友達は、こういつてくれたのです。「倫子は倫子のやりたいようにやっていけばいいじゃない。その先はきっとなるようになるから。」と。こんなふうにもうすぐ支えてくれたのが友達だったのです。でも、その夢を追っている友達も、東京での一人ぐらしは不安だし、先のことが見えなくて悩んでいるとうち明けてくれたのです。夢を追っている友達だって先のことが見えなくて悩んでいる。だから、それを聞いた時、「支えてもらった分、私も支えてあげたい」そう強く思いました。卒業すれば皆それぞれの夢を追っていきます。私にできることはその皆の夢を応援することだと思います。

これから先、私が何かにつまずいた時、また今の友達に支えてもらいたいです。ずっとこの定時制でできた友達は、お互いに支え合える私の大好きな人達です。

「変わった?…変わった。」 四年 K

小・中学校の同級生にばったり会う。

最近はみんな、就職や進学で地元を離れた為に滅多に、会う事はないが、夏休みや地元の祭りになると帰省し、懐かしい顔を見る事が出来る。大体の人が、中学校をまともに行っていない私に対して声を掛けにくいのか、チロチロ私を見て、話もせず終わる。でも、中には「元気にしてた?」と声を掛けてくれる人もいる。

話をしていると「変わったね。」と言われる事がある。「そお?変わった?」と自分ではあまり気にはいなかったが、その事について少し考えてみた。

変わったと言われるのは、やはり私自身の心境の変化にあると思った。その中でも中学の時の登校拒否は私の人生を変えた最大の峠だったと思う。中学校に入学して数ヶ月、自分の弱い部分に負けて学校に行かなくなった私は、家にこもる事で他人との関わりを絶っていた。人の言葉全てが自分を攻め立てている言葉に聞こえて、話しをするのが嫌で、人と会うのが嫌だった。

中学三年生になった時、親が中間教室の話を持ってきた。そこは学校に行く事の出来なくなった子供達が集まり、勉強をしたり、一緒に遊んだり、「学校」というよりは「もうひとつの家」と言って良い程アットホームな場所だった。同じ漫画が好きな子と毎日絵を描いたりした。木曾から通っている子もいて、小中学校と一人で学校に通っていた私にとって、また新たな楽しみも増えた。徐々に引きこもりから外に出るようになった。

そんな中間教室生活を送っていた私だったが、二学期も終わりに近づくと、本格的に「高校受験」の話が出てくるようになった。当時の私は、「高校なんて中学校と同じで、行っても周りに付いて行けないしツマラナイ」そう思う反面、「新しい、楽しい学校生活が待ってるかもしれない」という期待と不安が入り混じっていた。

「高校受験」と言っても、勉強なんて全くしていないし、入れる高校なんて限られていた。悩んだ末、家からも近く、その時夜型の生活をしていた私にとって一番通いやすい時間帯の「夜間定時制」の学校を受験する事にした。

しかし、私の受験生活なんて周りの人から見れば、ただ遊んでいるように見えただろう。中学校三年分の勉強を数ヶ月そこらで全て出来る訳はなく、不安は愚か「やっても無理」と開き直って、普段通りの生活をしていただけだ。実際、入試の数学の問題なんて四問に手を付けただけだった。

なんだか自分でも状況を把握できないうちに高校生になってしまっていた。入学をしてしばらくは「学校ってこんな感じだっけ?」と久しぶりの学校生活になんとか調子が狂い、ふわふわ夢でも見ている感じがした。

そんな入学したての頃のクラス内は、初めて出会った人達とのコミュニケーションの難しさからか人間関係がゴタゴタになるなんてしょっちゅうで、私自身も、今までに一度もした事が無かった言い合い

の喧嘩もした。そう言えば今の四年生は生徒の入れ替わりが激しく、気付けば入学当初からのメンバーは六人。…いなくなった彼らは、今何処で何をしているのだろうか？そんなドタバタを何度も、何年も繰り返し、今は少しは落ち着いたんじゃないかと思う。

受験の時に思った二通りの考えは高校生活を振り返ってみると、どちらも半々くらい当たっていたんじゃないだろうか？そして四年生になった今、「進路」という壁が私の前に立ちはだかっている。去年の今頃は、周りのみんなが大学受験や就職にあたって取り組んでいるのを、文字通り「他人事」のように見ていた。「みんな大変だなあ…来年私もああなるのかなあ…」なんてのん気に考えていたら…あつという間に自分の番。

今までは職場から学校という生活でゆっくり考えている時間なんてなくて、先延ばし先延ばしになっていたが、四月に入って体調を崩して家で療養していた時に、初めてゆっくり、いろいろと考えてみる事が出来た。考えた末、ずっと前から興味があった日本史学を学びたい…進学したいという決心をした。二年半続けたバイトも辞めてそれに専念する事にした。進路調査の時に「何でこの学科に進みたいの？」と聞かれた。理由は「今は日本の、長野県の歴史について知らない事だらけだけれど、それを学んで、多くの人にも知ってもらいたいから」だと答えた。中学にも行ってないし、学校の授業にも付いて行っていない、怠け物でのん気…そんな私が進学をするなんて無謀な事だと思う。けれど、それでも今までの「まあ…なんとかなるんじゃない？」というマイペースな私に「何かがしたい！」そう思える気持ちが加わった事は、やっぱり『変わった』と言えるんじゃないかと思う。

他人から見た『変わった』私は良い方に行ったのか、悪い方に行ったのかは判らないけれど、私自身はこの4年間で大きく変わったんじゃないかと思う。

相変わらずマイペースなのは変わらないし、人と話すのも苦手だけれど、この先ちょっとずつ、ちょっとずつ変わって行けたらと思う。

「夢のために・・・」 四年 Y

今、私はここに立っている。ここに来るまで色々なことがあった。

私は三年前の四月、定時に入学した。期待や不安を抱きながら、自分を変えたくて「前へ前へ」出ようとした。友達も、自分から積極的に作っていった。担任の先生にも恵まれた気がする。トラブルも、たくさんあったけど、それなりに楽しくやってきた。振り返ってみると、具体的なことはあまり覚えていない。でも色んな人がいた……。顔も覚える前に辞めていった人、問題起こした人、転入してきた人、嫌いだった人、ケンカした人、好きだった人……。何だか懐かしく思う。

四年間の中で今が一番充実してて、楽しいかもしれない。恋したり、学校サボったり。でもわかっている。進学のために学校行かなきゃ！って。休みの日、友達と遊んでる時間が好き。バカやって、お腹が痛くなるくらい大笑いしたり、でもたまには真面目な話して、泣いてみたり……。いつも私の周りには友達がいるから、ここを離れるのはツライ。すごく心地良いから……。

でも動かないわけにいかない。だって夢もある。大事な……。その夢のために定時に入ったんだから。まだ将来は漠然過ぎて、よく見えない。だから不安がいっぱいで、自分が楽しく過ごしてる姿が想像できなくて、前に進むのが怖い。「夢のために……」って思うけど。

やっぱり友達は大切に思う。学校は勉強する所だけけど、私は友達に会うために来てたりする。もちろん勉強も大事。でも友達の存在はもっと大きい。

今年は時間が経つのが早い気がする。気が付けばもう、九月……。一番楽しかったのは夏。夏はお祭り三昧だった。文化祭もあって、スゴク忙しかったけど、充実して楽しかった。浴衣もいっぱい着た。お祭りでも、文化祭でも。「今年、最後だから着よう！」って友達と一緒に着た。文化祭は最高だった。一番心に残ってるのは後夜祭。全日の子たちと、わけがわからなくなるくらい踊った。花火もキレイで、ラストを飾る火文字の「旅立ち」が何だか切なく見えた。楽し過ぎて終わるのが嫌だった……。

今年はみんなが将来に向かって一步を踏み出す準備の年。そして来年は自分の進みたい道に行くために、みんなと離れなければならない年。切ない……。寂しい……。でもみんなが歩いてく。夢に向かって……。だからそんな切ない気持ちに負けずに自分も歩く。「がんばらなきゃ！」って今、本当に思う。

それが今の私の心境。

「木曾高校定時制野球部」 四年 ○

定時制に新たに野球部を作って三年…今年、遂に念願の野球大会に出場することが出来ました。それは、僕がこの定時制に来た時には、全く予想もしていなかった事でした。

四年前（まあ、正確には三年半前かな？）、この定時制に入ってクラブを決める時、僕は、第一希望にこそバトミントンと書いたけれど、第二希望には確か野球と書いていた気がします。でも、他に野球をやる人はおらず、また入りたての一年生だった事もあり、上級生に「野球しない？」などとも聞けず、やっぱり定時制で野球をやるのは無理なのかなー？と、思っていました。しかし、二年生に上がり、新生（つまり現三年生の事です）が入ってくると、少し状況が変わって来ました。当時一年生のN田君とM岡君が「野球同好会を作ろう」と、話していた様な気がしたので、もちろん僕もそれに賛同して野球同好会が出来ました。しかし、その野球同好会は人数こそ十人以上いたけれど、実際に活動していたのは三、四人程度しかいませんでした。かく言う自分もキャプテンで在りながら、バトミントンの練習をやったりしていて、野球にいない事もありました。そんな感じで、結局二年生の時は、人数もちゃんとは集まらず、試合どころか練習すらままならない状況でした。しかし、三年生になると野球同好会は、同好会から部に変わり、ヘルメットなどを購入するなど少しずつ本格的に動き出しました。しかし、肝心の人数が未だそろわず、試合とまでは行きませんでした。それでも、二年生の頃よりも多少人数も増え、それなりの練習も出来る様になって来ていました。

そして、四年生になると僕が今年で最後だからと言う事もあって、自分はもちろん、下級生（特に三

年生)も「今年こそは試合に出る」と気合が入っていました。今まで問題だった人数も、頑張ってきた甲斐があって、何とか九人以上集まり、試合をやるという事が現実味を帯びて来て、遂に、定通中信野球大会に出場する事が決まりました。それからと言うもの、少ない人数で、短いクラブの時間を使い練習をしたり、全日制の野球部と練習試合をしてもらったりと(まあ、この時点で試合をすると言う目標は一応達成してるけど…)、僕にとってなかなか充実した期間でした。しかしその全日制との練習試合で、チームの守備の要のY窪君が骨折をしてしまうと言う、アクシデントにも見舞われてしまいました。Y窪君が抜けてしまったのは、とても残念だったけど、だからY窪君の為にも頑張ろうと、僕達はいっそう気合が入りました。

そして、遂に迎えた中信大会当日、メンバーはY窪君を除く十人で挑む事になり、僕は四番、ショートと言う、攻撃的にも守備的にも重要なポジションをやる事になりました。相手は、筑摩高校の通信制でした。僕達の先攻で試合が始まると、いきなり先頭バッターの中田真吾君がランニングホームランをし、チームに勢いをつけて一死二塁で僕に打席が回ってきました。良い緊張感で打席に入った僕は、少し高めに入ってきた球を強振しました。すると、打球はレフト方向にライナー性で飛んでいきました。「抜けるー!」と、僕が思った瞬間、ボールは相手のレフトのグラブにすっぽりと納まってしまいました。折角の良い当たりだったのに、相手の好守に阻まれヒットにはならなかったのです。結局初回は一点止まりで、逆にその裏、相手に三点を取られてしまいました。追い駆ける立場になった僕達は、二回の攻めで点を取る事は出来なかったけど、相手にも追加点は与えず、二点差のまま三回の表の攻撃に入りました。するとその回、みんな一巡したせいか、ピッチャーの球にも多少慣れ、ヒットが続きました。一点を返して尚、ランナー一塁二塁の場面で僕の二打席目が回ってきました。しかし、チャンスだったせいか力んでしまった僕は、ショートフライに倒れてしまいました。でも、後続のバッターが、ランナーを返してくれた為、この回三点を入れ、見事に逆転に成功しました。しかし、その裏、二点入れられ再び逆転されてしまった僕達でしたが、四回の攻撃で二点を挙げ、さらに逆転し返しました。ちなみに、僕の第三打席はサードのエラーによる出塁で、特に得点には関係ありませんでした。そのまま、両チーム互いに点は入らず、六対五で僕達がリードしたまま最終回の攻防にはいりました。最終回の攻撃、僕達は、チャンスこそ作ったものの、結局得点は出来ず、一点差のまま最後の守備につきました。簡単に一死を取って、二人目のバッターの打球が僕の所に飛んできました。僕が慎重に取ってさばいた次の瞬間、ファーストがポロツと、ボールをこぼしてしまったのです。でもまあ、エラーは仕方ないと気を取りなおして、守備に着いたけど、野球に限らずスポーツと言うのは面白いもので、そう言う一つのミスで流れががらりと変わってしまい、結局二まで取ったんだけど、最終的には六対七で、サヨナラ負けしてしまったのです。でも僕は、サヨナラ負けをしてしまった事は凄く悔しかったけど、出来たばかり、しかも二ヵ月程度しか練習していないチームで、ここまで戦えた事に凄く満足しています。そして、秋にもう一度大会があるので、その時には何としても勝ちたいです。

5、終わりに

以上、本年度の生徒作品を各学年からランダムに挙げてみた。特に意図したわけではないが、一、二年生の作品と三、四年生のそれとを比較したときに、表現力においても内容においても格段の進歩が見られる。これは、定時制での仲間との生活や社会的な関わりが彼らに大きく影響したからだと考えられる。

それは言い換えれば、ここでの生活を通して、自分の居場所を確立した彼ら自身が、自分の拠って立つ足元を固め、大きく成長したということであろう。冒頭述べたように、効率優先が叫ばれ、弱者切り捨てが平気で行なわれる中で、定時制はその存続そのものが危機に瀕している。しかし、こういった生徒を見るとき、少人数ゆえの社会でこそ自分を発揮できる彼らにとって、定時制が文字通り彼らの居場所になっていることを強く感ずる。

今後も生徒と会話をし、自己表現力を高めていく中で、少しでも彼らの自立のバックアップができればと強く願っている。

感動の生活体験発表会 参加者感想 1 保護者・中学の先生編

自分の気持ちを人前で話すことはとても勇気がいることだと思います。特に苦しかった過去を振り返って語るのは並ではないと思います。そんなことができるこの発表会は、定時制に入学してから、いかに発表している生徒の皆さんが大きく成長したかの証だと思います。又、語れる仲間、先生方であるということでもあると思います。とてもいい発表を聞かせていただきありがとうございますし、卒業生をこのように成長させて下さっている定時制に感謝です。誠君が夢をもって頑張れるようになったと聞いて嬉しかったです。ぜひこれからもよろしくお願いします。下野君の発表聞けず残念でしたが、よろしくお伝え下さい。(松永泰幸)

素晴らしい発表でした。いろんな体験をお聞きし、本当に感激しました。また一つ成長することができたと思います。私も元気ももらいました。皆さんに100点満点をあげたいです。(織田和子)

それぞれの個性が出ていてどれも心打たれる内容が多かった。それだけ学校生活や先生、友達との関係が深いものであると感じることができました。今回の発表に参加できたことに感謝します。(奥原けさ代)

定時へ通って学校生活の楽しさを感じることができたこと良かったと思っています。(松岡和江)

どの生徒も精一杯考えていたり、生きていたりしている背景を思うとき、どこに採点の基準をおいたらいいか困りました。不登校であった生徒が、こうして発表しているそのことがもう100点であります。100点にできないできない自分があります。もっとできるのだからという期待でしょうか。(細野耕司)

自分の歩んできた道に自信を持っている姿に感動しました。様々な経験をまだまだ若い

皆さんがされて、それを受け止め、悩みながらも乗り越えてきたことがよく伝わってきました。またいろいろ悩んだからこそ、友達のよさや大切さを感じているのだということもしっかり伝わってきました。自分のことを話すのは勇気が必要です。でも精一杯話そうとしている姿勢、大切にして下さい。(丸山勇)

それぞれに自分の経験、体験を踏まえて発表していて感心しました。学校に来る意味、友達の大切さ、先生と生徒の間柄など、改めて考えさせられました。生徒の皆さん、自分の夢に向けて、ぜひ頑張ってください。(久保田篤)

この発表会をきかせて頂くようになってから3回目になりました。どの子も様々な悩みをかかえながら精一杯生きていることが本当によく伝わってきます。友達同士の関係、生徒と先生との関係がすばらしいこともよく伝わってきました。小中学生のころのことを考えると、今高校へ来ているという、そのことだけでもすごいことだと思える子も堂々と自分のことを語っていたと思います。精一杯生きる彼らを心から応援したいと思います。ありがとうございました。(古野仁司)

みんな元気よく発表できました。(進藤常弘)

新井雄大君を担当していました。彼がみんなの前で堂々と声も彼なりにしっかり出して自分のことを発表できたこと、嬉しく思いました。またわずか半年ですが、随分成長したと感じました。これからも少しずつ定時制の生活を通して成長して欲しいと願っています。奥原さんも中学のこと、高校でのことを堂々と発表してくれよかったです。櫻井君が発表できなかったこと残念ですが、今後ともよろしく願いいたします。本日はありがとうございました。(安藤均)